

## 痛みに対する強さが無症候性心筋梗塞のリスクと関連

自覚症状のない心筋梗塞（以下、無症候性心筋梗塞）は症候性の心筋梗塞と同等の死亡リスクがあるといわれている。なぜ一部の人に無症候性心筋梗塞が起こるのかはわかっていないが、ひとつには痛みの感度が関係している可能性がある。本研究では、疼痛耐性と心筋梗塞の自覚との関連について検討した。

一般住民 4,849 人を対象に、冷たい水に耐えられなくなるまで手を入れるという寒冷昇圧試験（標準的な痛覚感受性試験）と、過去の心筋梗塞の徴候を検出する心電図検査を実施した。その結果、過去に無症候性心筋梗塞をおこしていたのは 8%（無症候群）、診断済みの心筋梗塞の既往があったのは 4.7%（症候群）であった。年齢および性別で補正後の疼痛耐性を比較したところ、無症候群のほうが症候群に比べて疼痛耐性が高かった（ハザード比 0.64）。疼痛耐性と無症候性心筋梗塞との関連は女性のほうが男性よりも強かった。

したがって、痛みに強い人は無症候性の心筋梗塞のリスクが高くなる可能性が示唆された。実際には、発作に気づかず診断を受けていない人も多い。心筋梗塞の症状は胸痛だけでなく、上背部や顎の痛み、息切れ、吐き気などの非定型の症状についても啓蒙する必要がある。

出典：Journal of the American Heart Association. Published online Dec 21, 2016;  
5(12): pii: e003846